第8章　予　兆

鳥はさまざまな予兆を示すとされ、鳥占いはギリシアでもローマでも重要視された。そのことを滑稽に誇張して、喜劇詩人アリストパネースは鳥たちの歌舞団に次のように自慢させている。

私たちはおまえたち人間にとって、アンモーン、デルポイ、ドードーネー、ポイボス・アポッローン[1]だ。なぜなら、おまえたちは、まず鳥に伺いを立ててからでなければ、どんなことにも取りかからないのだから。商売でも、日々の糧を手に入れることでも、結婚でも。占いによって判じるかぎりのあらゆるものを、おまえたちは鳥だと考える。実際、おまえたちには、ふと口から出たことも鳥だし、くしゃみも鳥と呼ばれ、奇遇な道連れも鳥、声音も鳥、従者も鳥、ロバも鳥だ。であれば、明らかじゃないか、私たちがおまえたちにとって予言を告げるアポッローンであることは。

（『鳥』七一六―七二二）

引用の後半は、占いと言えば鳥占いとほとんど同義になったことから、「鳥」という語が「占い」その

ものを表すようになったことを踏まえている。

このなくてはならぬものを人間に教えたのは、アイスキュロスによれば、プロメーテウスであった。人間の恩人であるこの巨人はカウカソス山の巌に磔にされながら、

私は鉤爪持つ鳥たちの飛び方も注意深く見分けた、どの鳥が性質の点で吉か凶か、どんな習性がそれぞれの鳥にあり、どれが互いに敵意あるいは愛着を抱き、共棲するものか、など。

（『縛られたプロメーテウス』四八八―五〇二）

と語り、火をはじめとして自分が人間に教えた有用な技術の一つに鳥占いを数えている。ちなみに、引用の中で「共棲」とあるのは占いに関する述語で、「一緒に座る（または、棲む）こと」がより逐語的な訳で、アリストテレースは、猛禽などの肉食動物について、占い師が「離れて座る」ことに敵対関係を、「一緒に座る」ことに友好関係を見る、としている（『動物誌』九・一・六〇八b）。

神話の中で占い師として有名なのは、まずテイレシアースとカルカースであろう。ソポクレースは『アンティゴネー』の中で、テイレシアースに次のように語らせている。

昔から鳥占いをする座――そこはあらゆる鳥が翼を休める場所――を占めていると、聞き覚えのない鳥の声がする。不吉で狂おしく、意味の分からぬ叫びだ。しかも、互いを蹴爪で引き裂いて殺そうとしているのが分かった。翼の風切る響きがそれを如実に示していたから。

（『アンティゴネー』九九九―一〇〇四）

テーバイの王権をめぐって争ったポリュネイケースとエテオクレースの兄弟がともに倒れたあと、クレ

オーンが新しい王位に就いていたが、クレオーンはテーバイを外から攻めたポリュネイケースの埋葬を禁じた。しかし、この禁を、ポリュネイケースの妹で、クレオーンの息子ハイモーンの許嫁（いいなずけ）でもあるアンティゴネーが破った。彼女にクレオーンは、彼女が死ねば自分も死ぬという息子の説得にもかかわらず、死刑を言い渡し、もとより結婚は取りやめとなる。引用はアンティゴネーが刑場へ引かれていった直後の場面で、この凶兆によりテイレシアースはクレオーンを諫止しようとしていた。しかし、クレオーンはこれを聞き入れず、息子を失い、そのうえに、妻のエウリュディケーまで死に追いやってしまう。

他方、カルカースはトロイア戦争に出征して、いくつかの重要な占いをしたが、その一つに、アウリスの港に集結したギリシア軍の出港を悪天候が阻んでいたとき、それが女神アルテミスの怒りによるものだとして、総大将アガメムノーンに実の娘イーピゲネイアを女神への犠牲に捧げさせることになったものがあり、よく知られている。その同じアウリスで、オウィディウスによると、カルカースはもう一つ占いをしたという。ギリシア兵らがしきたりどおりの祭儀を行っていると、近くに立っていたプラタナスの木へ、蛇が這い上がってゆく。蛇は、木のてっぺんにあった巣の中の八羽の雛鳥とまわりを飛んでいた母鳥をもろともに捕まえると、一呑みにした。誰もがびっくりする中で、

真実を予見する鳥占い師、テストールの子カルカースは言った、「われわれは勝つだろう。喜べ、ギリシア軍よ。トロイアは陥落するだろう。だが、われらの労苦は長く続くことになろう」と。そうして、九羽の鳥は戦争の年数を示すと解した。

（『変身物語』一二・一八―二一）

そうして、トロイア戦争は十年の歳月を数えることとなった。

1　ロームルスとレムス

ギリシアでは、鳥占いは、その重要性にもかかわらず、国家的な制度に組み込まれることはなかったが、ローマでは鳥卜官という公職が置かれ、それは権威が高く名誉ある地位として尊ばれていた。そのことを象徴するように、ローマ建国の際にも鳥占いが登場する。

すでにヌミトル王の弟［アムリウス］が罪のあがないをすませ、牧人たちは揃って皆、双子の指導者に従っていました。そして、二人とも、牧人たちを一つところに集め、城市を築くことで一致します。ただ、どちらが城市を築くかが問題でした。ロームルスが言いました。「争う必要はまったくない。鳥たちの答えが大いに頼りになる。鳥占いをしてみようではないか」。その考えに皆が賛成しました。一方は森豊かなパラーティウム丘の岩へと行き、もう一方は朝方にアウェンティーヌスの頂へと登ります。レムスが六羽を見ると、こちらは続けて十二羽を目にします。約束したことが守られて、ロームルスが都の裁量権を握ります。

（オウィディウス『祭暦』四・八〇九―八一八）

アムリウスは、実兄ヌミトル王から王権を奪うと、その娘イーリアの産んだ双子が自分への復讐をなさぬよう殺すことを命じたが、命じられた者が河辺に遺棄しただけだったため、双子の兄弟ロームルスとレムスはまず雌狼に養われ、次いで牧人の夫婦に育てられて成人し、祖父の仇を討ち、新たな都を築くことになる。この建都は前七五三年とされ、四月二十一日が記念日として祝われる。引用は、その日の記事としてオウィディウスが記すものである。パラーティウムとアウェンティーヌスの二つの丘は、テ

イベリス川をはさんで相対している。川の東岸にあるパラーティウムとその北のカピトーリウム丘を中心に、ローマルスは自分の名にちなんで都をローマと名づけ、まず境界となる城壁を築いた。しかし、アムリウスとヌミトルの兄弟が王権を争ったように、この城壁をめぐってローマルスとレムスのあいだにも争いが起こる。オウィディウスによれば、ローマルスは城壁の建設をケレルという配下に任せて言った。

「ケレルよ、この作業にはおまえが心して当たってくれ。そして、誰一人として、城壁も鍬で掘られた溝も越えさせてはならぬ。あえてこれを企てる者があれば、斬って捨てよ」。

このことを知らなかったレムスは、まだ低い城壁を馬鹿にし、「このようなもので市民が安全でいられるのか」と言いました。そして、すぐさま飛び越えたのです。この向こう見ずを、ケレルがシャベルで打って取り押さえます。レムスは血まみれとなって地面に身を横たえました。

王は、このことを知ったとき、心中に湧き出る涙を喉の奥に押し込み、心の傷を胸中にしまっておきました。おおっぴらに涙を流したいのですが、勇士の手本を示そうとしたのです。そして言いました。

「わが城壁を越える敵はこうなるのだ」。

けれども、ローマルスは葬儀を出してやり、そのときには、もうこれ以上涙をこらえようとはせず、隠されていた弟思いの心が皆の目に止まりました。棺が置かれたとき、最後の口づけを結んでやりながら言いました。

「さらばだ、思いに反して奪い去られた弟よ」。

（同四・八三八―八五二）

オウィディウスはローマ建国の王を庇ってレムス殺しを部下に押しつけているが、歴史家リーウィウスは、

言い伝えでは、レムスのほうに先に鳥占いの結果が現れたという。六羽の禿げ鷲であった。その結果が告知されたとき、二倍の数の鳥がローマルスの前に現れた。群集はそれぞれ自分たちの王を祝福した。一方は時間が早かったことを、他方は数にまさることを王権の根拠とした。口論を戦わせるうちに怒りの鞘当てが修羅場と化し、その混乱の中でレムスが打たれて倒れた。

（『ローマ建国以来の歴史』一・七・一―三）

と、いささかそっけなく、ローマルス自身を殺害者とする、よりよく知られた伝承を記している。

2　復讐の鷲

さて、鳥の示す予兆としてもっとも有名なのは、おそらく『オデュッセイア』の次の場面であろう。帰国したオデュッセウスは、乞食の姿に身をやつして自分の館に戻り、求婚者への復讐の機会を窺いながら、館の中の誰が忠実で誰が不忠者かを見きわめようとしている。乳母のエウリュクレイアは、たったいま英雄の足を洗った際、かつて猪の牙によって膝の上に受けた傷の跡を認めて、その正体を知っていたが、妻のペーネロペイアはまだ気づいていない。彼女はオデュッセウスに心中の不安と悲しみを打ち明けたあと、自分の見た夢を解釈してくれるように頼む。

「さあ、私の見た夢を聞いて判じてください。鷲鳥が現れ、屋敷の中に二十羽、小麦を啄んでい

ます。水から上がったところで、私は鳥たちを心なごませて眺めています。そこへ山からやってきた鉤なりの嘴の大鷲が、すべての鵞鳥の首根を襲い、殺しました。倒れ伏した死体は屋敷の中に折り重なり、鷲は天空へと舞い上がりました。私はと言うと、夢の中とはいえ、涙を流して嘆いていましたが、そのまわりに髪の美しいアカイアの女たちが集まってきました。鷲が鵞鳥たちを殺したことで私が悲しみに沈んでいますと、鷲は再び降りてきて突き出た梁の上に止まり、人間の声で私を諫めて言いました。「元気を出せ。音に聞こえたイーカリオスの娘よ。これは夢ではなく、現実だ。立派に成就するであろう。鵞鳥は求婚者であり、私が鷲と見えたのは先ほどのこと、いまはそなたの夫としてやってきた。すべての求婚者に惨めな死をもたらす決意だ」。鷲がこう言うと、私は蜜のように甘い眠りから覚めました。鵞鳥たちはと見回すと、館の中にいました。水桶のそばで小麦を啄んでいるのは、先ほどと同じでした」。

彼女に応えて策略に富むオデュッセウスが言った。「奥方様。どうしてその夢解きを間違って判じることがありましょうか。まさにオデュッセウス王みずからが、あなたに実現の次第を明らかにされたのですから。求婚者の破滅は明らか、それも一人残らずです。誰も死の運命を逃れないでしょう」。

（『オデュッセイア』一九・五三五―五五八）

オデュッセウスはこの夢解きのとおりに、不埒な求婚者たちへの復讐を果たすことになる。そこで、ペーネロペイアは正夢を見たのであり、そこには、鷲は神々の王ゼウスの鳥でもあるので、神のお告げが示されていたと言えるかもしれない。

3　鷲の困惑

ギリシア語では「宇宙」ないし「世界」を意味するコスモスという語の本義は「秩序」であり、世界は（少なくとも、その常態について）これを治める神の意思と目的に沿って動くというのが一般的な考え方であったが、ローマではいま少し現実的に、世の中には必ずつねに混乱の要素が入り込む、と考える傾向があったように思われる。こうした違いを反映しているのかどうかは分からないが、ペーネロペイアの夢見た鷲が実現されるべき正義を予示したのに対し、ウェルギリウスは鷲、それも「ユッピテルの鷲」を騒乱の兆しに用いた。

これに加え、さらなる大事件をユートゥルナは起こす。高き天に示された兆しは、いかなるものにもまして、まざまざとイタリア人の心をかき乱した。人心を欺いたその異兆とは、真っ赤な空に飛ぶユッピテルの金色の鳥であった。それは、岸辺の鳥たちを追いまわし、乱れた鳴き声を鳥の大群から引き起こしていたが、突如として水辺に舞い降りるや、一羽の見事な白鳥を邪（よこしま）にも脚の鉤爪でさらってゆく。イタリア人は息を呑んだ。と、水鳥たちがことごとく、見るも不思議ながら、叫びとともに向きを転じて逃げるのをやめると、天空を暗くするまでに翼を羽ばたかせる。空一面に敵を追撃して雲をなし、ついには、力でこれを打ち負かした。かかえた重さを支え切れず、鷲は獲物を爪から放し、川の流れへ投げ出すと、雲のかなたへ逃げ去った。

そのとき、この予兆にルトゥリー人らは歓呼の叫びを上げ、戦いの備えをする。最初に鳥占いのトルムニウスが言った。「これだ、これだったのだ、私が願い求めていたのは。私は予兆を受け入

れ、神意を認める。私のあとに続け。剣を取れ、哀れな者たちよ。おまえたちは邪なよそ者のもたらす戦争に震え上がり、まるで弱々しい鳥のようだ。それでも、おまえたちの岸をいま力ずくで荒らしているあの者も逃げ出すであろう。沖のかなたへと帆を向けるであろう。おまえたちは心を一つにし、隊伍を密に固めよ。戦って護るのだ、おまえたちから奪われた王を」。彼はこう言うと、敵の正面へ槍を投げつけ、突進した。

（『アエネーイス』一二・二四四―二六七）

英雄アエネーアースと彼の宿敵であるルトゥリー人の王トゥルヌスは、戦争の勝敗を二人の一騎打ちによって決することに合意して、いま戦場の中央に祭壇が設けられ、そこで誓約が結ばれているところであった。しかし、トゥルヌスの姉妹ユートゥルナ（彼女自身は泉のニンフで、ユッピテルと結ばれて不死を得、女神の力をもっている）は戦いが兄弟に不利であることを知り、女神ユーノーの促しもあって、一騎打ちを阻もうと画策した。まず、ルトゥリー人の勇士の一人に化けて、トゥルヌスだけを危険に曝すな、数でも力でもこちらが上だから敵に立ち向かえ、とけしかけ、次に繰り出した手だてが引用に示した予兆であった。言うまでもなく、鷲はアエネーアースを、白鳥はトゥルヌスを、水鳥の群れはルトゥリー軍を表している。このあと、トルムニウスが投げた槍によって神聖な誓約の場は蹂躙され、その中でアエネーアースも、どこからともなく放たれた矢で負った深傷のため退避して、トゥルヌスと戦うことを一時断念しなければならなくなったので、この点で、予兆は実現されたと言える。しかし、トルムニウスが正しく鳥占いをしていたかどうかはまた別の問題で、予兆は彼が思ったような意味で神意を示してはいなかった。そのことを象徴するように、アエネーアースが、母神ウェヌスの助力で傷を癒し、戦場に戻って戦いの形勢を逆転させたとき、ルトゥリー軍の中で真っ先に倒された一人がこのトルムニウスだ

った。

［注］

（1）アンモーンはゼウスに相当するエジプトの神格で、リビア砂漠のシワに有名な神託所がある。デルポイとドードーネーはそれぞれ、アポッローンとゼウスの神託所のある聖地。